

# 開院70周年記念特集

NOW2023

70<sup>th</sup>  
anniversary

## 病院長ごあいさつ

## 開院70周年にあたって



関西労災病院 病院長

林 紀夫

関西労災病院が70周年という節目の年を迎えることができましたのも、皆様のご支援ご協力の賜物と、厚く御礼を申し上げます。

当院は、昭和28年1月に地域の強い要望を受けて、4診療科病床数50床をもって開院し、現在では26診療科642床にまでなっております。その間、労働者健康安全機構の設立理念に基づき、勤労者の医療を推進するとともに、阪神圏域の中核病院として、質の高い高度急性期医療や救急医療を提供してまいりました。また、13年にわたる長い増改築期間を経て平成16年3月に現在の病院建物が竣工し、その後も、新手術室棟の増築、外来化学療法室や内視鏡室の拡充、手術支援ロボット、ハイブリッド手術室等の最新医療機器の導入を行い、高度医療の進歩に対応してまいりました。

地域がん診療連携拠点病院の指定を平成19年1月に受け、阪神圏域のがん診療の中心病院として地域の皆様の信頼を得るように努めてまいりました。がん診療の進歩には目覚ましいものがあり、その高度化に対応してIMRT対応リニアック2台を備えた「がんセンター」を平成25年に開設し、平成30年秋には遺伝子診療科を整備し、がんに対するゲノム医療にも取り組んでいます。

平成21年12月には地域医療支援病院に承認され、医師会や地域医療機関の皆様との連携を進め、地域医療に積極的に取り組んでいます。今後も医療連携総合センターを中心として、地域の医療連携をさらに強化してまいりますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。また、地域住民の皆様には、市民公開講座等を通じて最新の医療や疾病予防の情報を提供させていただいており、今後も継続し、地域の健康増進にも努めてまいります。

近年の医学医療の進歩には目を見張るものがあり、本邦における人口の高齢化に伴う疾病構造の変化や労災疾病の変化を考えると、当院の果たす役割も大きく変化することが予想されます。今後も関西労災病院の理念である「良質な医療を働く人々に、地域の人々に、そして世界の人々のために」のもと、地域と勤労者の皆様の信頼と期待に応えるべく、職員一同全力を挙げて病院運営に努めてまいりますので、今後ともご支援ご協力よろしくお願い申し上げます。

## 寄稿

### 開院70周年に寄せて

労働者健康安全機構 理事長

有賀 徹



関西労災病院の開院は昭和28年(西暦1953年)1月ですから令和5年(2023年)に70周年となります。この区切りを記念する年報の編纂にあたり、御挨拶をさせていただきます。まずはおめでとうございます。そして、現在の林紀夫病院長をはじめとする病院の皆さまに、並びに70年に亘り関西労災病院の発展に尽くされた多くの先達の皆さまに深甚なる敬意と感謝の念を表したく思います。誠にありがとうございます。

さて、関西労災病院にとっての70年は地域の、と言いますか我が国の現在に至る様々な軌跡を映しての運営であったに違いありません。病院の沿革を辿ると、その発足は尼崎市民の強い要望があったとあります。戦後に農業国から工業国へと、そして高度経済成長において多くの人々が尼崎市など都市部へと移り住み、また病院発足の当初から「内科と外科以外に、整形外科と理学診療科を設けた計50床」とあって、労災病院として阪神工業地帯において増加する労働者への福祉という役割を期待されていたことが十分に想像できます。その後、548床(昭和31年)、620床(昭和48年)などと規模が拡大するなかで、時代の変遷に伴う労働態様や職場環境の変化、勤労者の疾病構造の変化等に対応すべく診療機能の充実を図りながら、阪神間で高度急性期医療を提供する642床の地域中核病院として今日に至ったと理解します。

上述した経済成長は広域なグローバル化の波とともに、田園地帯から都市部への人口流入や、労働の柔軟化・雇用の流動化、つまり女性雇用の増加、非正規雇用・転職の増加などに加え、生活面では共働き、核家族化、皆婚主義の衰退、離婚率の増加などあって、今や独居老人や老々介護などが社会の課題となっています。かくして少子高齢化の益々の進展にあって、社会保障の充実は総労働力の維持あってこそとなります。従って、治療と仕事の両立は正に勤労者医療・産業保健の重要なテーマとなっています。国民一人ひとりの生涯にわたるキャリアパスを支援することが、延いては国力の維持に与るといえるわけです。高齢になっても病を得ても可能であれば働き続けていたいとなれば、私ども労働者健康安全機構は組織を挙げてこのことを推し進めてきました。そのような我が国の近未来に向かって関西労災病院も多大な活躍と発展が期待されています。加えて、関西労災病院は臨床研修医や専門医資格を目指す専攻医ら若手医師の修練の場でもありますから、患者一人ひとりの人生をこのように俯瞰しつつ活躍できる医師の養成という大きな役割も担っています。

ということで、最後になりましたが、地域の皆さま、そして大学、行政、医師会、病院会など関係する皆さまにおかれましては、大きな任務を課せられた関西労災病院を今まで通りお引立ていただき、またその大いなる発展への御支援をも賜りますようにここに枉げてお願い申し上げます。

## 寄稿

## 祝辞



尼崎市長

松本 眞

関西労災病院が開院70周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

貴病院が70年という長きにわたり、多様化するニーズに応じた良質で安全な医療をご提供いただき、今日まで尼崎市民の健康を日々支えていただいておりますことに深く敬意を表しますとともに、心より感謝を申し上げます。

尼崎市は、これまでまちを良くしようと取り組んでこられた多くの方々のご尽力により、近年まちのイメージは改善傾向にあり、「本当に住みたいまち」、「穴場なまち」などとして注目されています。

しかし、その一方で、がんや糖尿病、循環器疾患などの「生活習慣病」を起因とした重症化や後遺症などにより個々の社会機能が低下し、日常生活において支援や介護を必要とする市民も見受けられるなど、ライフステージごとに様々な健康課題があります。

そうした中、尼崎市では、まちづくりの取組の柱の一つに「誰もが暮らしやすいまち」の実現を掲げ、妊産婦検診の助成や乳幼児健康診査の実施、フレイル・認知症対策など、ライフステージに応じた健康づくりへの支援を進め、市民の健康寿命の延伸を目指し、健康で生き生きと暮らすことができるまちづくりに取り組んでいます。

こうした取組の中には、医療・介護事業者の連携推進を目的とする「尼崎市医療・介護連携支援センターあまつなぎ」の設置や、自分らしい暮らしを続けるため、これからの考えるきっかけとしていただけるよう「尼崎市在宅療養ハンドブック」を作成するなど、貴病院をはじめとする医療・介護の専門職の皆様方のご協力のもと取り組んでいるものも数多くあります。

わが国で少子高齢化が今後ますます進むことが見込まれる中、市民の皆様が住み慣れた地域でいつまでも自分らしく暮らしていくためには、医療の果たす役割はこれまで以上に重要なものとなります。どうか林病院長はじめ貴病院の皆様におかれましては、引き続き市民の皆様の健康増進や地域医療の充実にご指導と多大なるお力添えを賜りますよう、心からお願い申し上げます。

最後になりましたが、貴病院が70周年の節目を契機にさらなるご発展を遂げられますことを心から祈念いたしましてお祝いのご挨拶といたします。



## 寄稿

## 関西労災病院開院70周年を祝して

兵庫県医師会 会長

八田 昌樹



関西労災病院が、開院70周年を迎えられましたことに兵庫県医師会を代表いたしまして心からお祝い申し上げます。これは、関西労災病院の歴代の先生方及び職員の皆様が、阪神淡路大震災、台風・豪雨等の自然災害、医療費抑制政策、新型インフルエンザや新型コロナウイルス感染症等に対して幾多の苦難を乗り越えながら、地域医療支援病院として医療を行い、勤労者だけでなく住民の安全と健康を守るために努力されてこられた賜物です。

特にこの3年間は新型コロナウイルス感染症との闘いにおいて、阪神間における最前線の病院として大きな役割を担ってこられました。当初、県立尼崎総合医療センター、兵庫医科大学病院、県立西宮病院が、重症及び中等症のコロナ患者を受け入れ、関西労災病院は地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院としてコロナ以外の第3次救急医療や一般診療、がん診療を行ってきました。しかし、コロナも第5波以降になると感染者数も多く医療は逼迫し、一般救急患者の中にもコロナ陽性者が存在し、コロナ病棟を設けざるを得なくなりました。そのため、地域の一般診療、がん診療に多大な影響がありましたが、関西労災病院は、医療逼迫による医療従事者の不足という困難な状況も克服し、地域医療の役目を果たしてこられたのは称賛に値します。

この10年間は、がんセンター棟、術前センター、中央処置センター、ハイブリッド手術室の開設、アンギオ、MRI、CT等診断装置の更新、ガンマナイフ更新、IMRT(強度変調放射線治療)装置、手術支援ロボット da Vinci 導入による先端治療の推進を行ってこられました。

令和5年7月には外科の村田幸平副院長が世話人となり、第99回「大腸癌研究会学術集会」を尼崎市総合文化センターで開催されました。全国から多数の先生方が参加されて盛会でした。

我々、開業医も関労クラブの一員として、地域医療連携の基盤をサポートしていく所存です。関西労災病院の理念である「良質な医療を働く人々に、地域の人々に、そして世界の人々のために」のもとに地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院として阪神圏域の中核病院の役割を担い、今後の益々のご発展を祈念しまして開院70周年のお祝いのご挨拶とさせていただきます。

## 寄稿

## 祝辞



尼崎市医師会 会長

杉原 加壽子

関西労災病院が開院70周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。沿革を拝見し、昭和28年に病床数50床をもって診療を開始されたときからのご発展を目にして、尼崎市医師会を代表して敬意と感謝の意を述べさせていただきたいと思います。

私が関西労災病院ですぐに思い出すのは、昭和54年の福永騎手の落馬事故です。当時私は医学部の学生で、競馬ファンでもなく特に思い入れがあったわけではありませんが、落馬事故で重体となられた福永騎手のニュースが流れたときに、「関西労災病院にはるんや」と思った記憶があります。その前年には暴力団同士の抗争による組長襲撃事件があり、狙撃された組長が関西労災病院に運ばれた、というニュースを耳にし、さぞや大変な事態になるのだろうなと思った記憶もあります。関西地域で大きな信頼を得ておられる関西労災病院ならではのニュースだと思いますし、高い医療技術が買われてのことですので、すごいところだなあと思っていました。その後個人的には、おそらく病院の増改築工事中のころに、夫が腎結石の破碎術で入院させていただいたことがあり、また次男が親知らずの抜歯で手術していただきました。その節は大変お世話になりありがとうございました。

尼崎市医師会にとりましても、この70年を共に歩んでくることができたということに本当に感謝申し上げます。尼崎市は市立病院を持たないということで、基幹病院として関西労災病院と尼崎総合医療センターの存在はとても大きな意味があります。高い専門性を生かした診療でお世話になるとともに、尼崎市医師会の理事として医師会運営にも参加していただき、密な連携を取らせていただいています。このコロナ禍におきましても、お忙しい折にもかかわらず毎月の対策本部会議に院長自らご臨席賜り、尼崎市の問題解決に向けて前向きに取り組んでくださいました。本当に感謝の念に堪えません。これからも病病連携・病診連携として、どうぞよろしくご指導くださいますようお願い申し上げます。

最後に、関西労災病院のみなさま方がますますご活躍されますよう、またこれからの関西労災病院がますますのご発展を遂げられますよう、祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。

## 寄稿

### 開院70周年に寄せて

兵庫労働局 局長

金刺 義行



このたび、独立行政法人労働者健康安全機構 関西労災病院が、開院70周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

振り返れば、昭和28年1月20日の開設以来、阪神地域における急性期高度専門医療を担う中核病院として、良質で安全な医療をご提供いただくとともに、独立行政法人労働者健康安全機構が掲げる「勤労者医療の充実」「勤労者の安全向上」「産業保健の強化」という理念に基づき、勤労者お一人おひとりの人生を支える大きな役割を果たし、この記念すべき年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

さて、兵庫労働局管内においては、近年微少傾向にあるとはいえ、年間約2万5千人の方が業務や通勤で被災し、新たに労災保険給付を受給されており、石綿関連疾患や精神障害等の発症による労災請求事案は増加傾向にあるところです。

このような中で、貴院からは、業務上外の判断や障害等級の認定に必要な検査並びに医学的見解をいただくなど、労災補償給付の迅速・公正な決定にご協力をいただいております。

また、治療就労両立支援センターにおける治療と仕事の両立支援の実践への取組や前身組織の時代に培われた過労死やメンタルヘルス不調の予防対策に基づくより実践的な予防医療の確立を目指した調査研究など、私ども労働基準行政と連携した支援・周知啓発活動にも大きな役割を担っていただいているところです。

さらに、健康診断センターにおいては、昭和57年の開設以降、勤労者に対する定期健康診断の実施をはじめ、石綿やじん肺などの職業性疾病に関する法令に沿った健康診断の実施についても多大なるご協力をいただいております。

貴院におかれましては、開設70周年を機に、地域医療支援病院としてますます地域住民や医療従事者からのご信頼を得られますとともに、勤労者医療機関として働く人々の職業生活を医療面から支え、さまざまな政策的課題にご対応いただき、勤労者医療のさらなる向上と発展にご貢献を賜りますよう期待申し上げます。

最後になりますが、貴院のますますのご発展と今後のさらなるご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 寄稿

## 関西労災病院の開院70周年をお祝いして

大阪大学医学部附属病院 病院長  
大阪大学大学院医学系研究科消化器内科学 教授

## 竹原 徹郎



関西労災病院が開院70周年をお迎えになるとお聞きしました。日頃病院のために尽力されている職員の皆さまには心よりのお祝いを申し上げます。

関西労災病院と大阪大学の結びつきはかねてより強く、わたしがよく存じ上げている内科系科に限っても、それぞれの診療科で阪大の内科系科教室出身の先生方が活躍されています。関西労災病院は、医学部の学生にとっても、憧れの研修病院です。600床を超える大きな総合病院であること、充実した高度な診療内容、そして各診療科の先生方をはじめ職員の皆さんの熱意と優しさが、クラークシップなどを通じて、学生に伝わってくるのだと思います。優秀な研修医の先生が集まり、彼らがまた将来病院を盛り立てていくというような好循環がまわっていると感じています。大阪府の西に広がる阪神間は、関西でも屈指の人口密集地帯ですが、関西労災病院は大阪と神戸・西宮をつなぐ尼崎で、この地域の急性期医療を担われています。このような存在感が、長い歴史のなかで揺るぎないものとして、関西労災病院に根付いていると感じております。

すこし個人的な話になりますが、かく言うわたしも、かつて大学卒業後の駆け出しのころ関西労災病院でお世話になりました。大学での1年の臨床研修を終え、一つ目の外病院での勤務を経て、ようやく丸二年が過ぎようとしていた頃です。関西労災病院の研修医として務めた期間は4か月半と極めて短いものだったのですが、地域の第一線の病院で充実した臨床研修をさせていただきました。当時、指導していただいた先生方(内科はもとより、外科の先生、放射線科の先生、病理の先生などなど数えあげればきりがありません)のことや、担当させていただいた患者さんのことをいまでも鮮明に思い出します。卒後間もない頃の経験というのは、誰でもその後の医師としてのキャリアに大きな影響を与えるものですが、わたしも関西労災病院に育てていただいたと常々感謝しています。たまに林病院長を訪ねて、病院の管理棟をお伺いすることがあるのですが、そこには関西労災病院の長い歴史のなかで勤務された先生方お一人お一人の名前が刻まれた金属のプレートがあります。そこに、自分の名前を見つけたときはびっくりしました。

今後も、関西労災病院が長い伝統のもと、ますます発展されることを心より祈念しております。此度はまことにおめでとうございました。

## 寄稿

## [関西労災病院:開院70周年]を祝して 天の時、地の利、そして人の和

関西労災病院 名誉院長

早川 徹



[関西労災病院:開院70周年]、おめでとうございます。

顧みると、1998年春、大阪大学を退官し、恩師:最上平太郎院長の後任として、[第5代関西労災病院長]に着任したが、当時の関西労災病院は、1991年より始まる長期13年計画の増改築工事が進行中であり、長引く運営困難状況に職員は疲弊し、経営も悪化しつつあった。

そこで、着任直後の年末・年始の休暇中に、関西労災病院の現状認識と問題点を指摘し、その改善・改革に向けての私見を率直に記した提言書(表題:[関西労災病院の現状認識と将来の発展に向けての私見])を作成し、当時の上部機関:[労働福祉事業団]の若林之矩 理事長に提出したところ、それなりに評価されたのか、2001年4月に、[事業団本部:医監(定員:2名)]に任命された。

そこで、当時今一人の[本部医監]であった[阿部 薫:横浜労災病院長]と共に、月例の[事業団本部:運営会議]に出席し、若林理事長はじめ[事業団本部:幹部職員]に「医療界の現況」や「労災病院の運営概況」等を伝え、論議にも積極的に参加し、提言・施策提案等もさせていただく機会を得た。

その結果、[関西労災病院:増改築課題]に関しても、[本部]と[病院]間の意思疎通が図られ、多彩な「建築設計変更」も容認されるようになり、[病院エントランス棟:正面玄関]前に建設予定であった[立体駐車場建設:計画]を廃して、画期的な「癒しの[ホスピタル・パーク(陽だまりの庭)]」建設計画等も容認された結果、新しい時代に相応しい[新病院]が完成し、2004年10月に[開院50周年並びに増改築工事完成祝賀式典]を開催することができた。

これも[労災病院]が戦後各地に「労働災害への対応」を主目的として設立・運営されていた時期、即ち「働く人々を主対象とした病院」より「地域住民等に対しても良質な医療を提供する機関」として進化・発展しつつあった時期に「病院増改築工事」に直面し、当時の[事業団本部]の指導・英断、[関西労災病院:各職種職員]の一致団結した尽力、更に「地元:医師会」の協力、そして多彩な「ボランティア活動」の展開等が相俟って、新時代に相応しい[関西労災病院]が再生し、2004年10月に[開院50周年並びに増改築工事完成祝賀式典]を開催することができたように思う。

正に「[天の時]、[地の利]、そして[人の和]」の成果である。

現在、わが国[医療界]は、長引く[コロナ禍]への対応、[少子高齢化:人口減少社会の到来]、そして[医師・医療人の働き方改革]、さらに[IT/情報革命への対応]など、新たな[改革・変革の時代]に突入しつつあるように認識されるが、[関西労災病院]が[林 紀夫院長([本部医監]兼任)]指導下、職員・関係者の協力・尽力等が相俟って益々発展しつつあるのは、大慶である。



## 寄稿

## 開院70周年に寄せて

関西労災病院 名誉院長

奥 謙



関西労災病院開院70周年誠におめでとうございます。本院が現在の状態で70周年を迎えることができたことは非常にうれしいとともに感慨深いものがあります。

私が関西労災病院に初めて勤務したのは1973年重症治療部(ICU)と脳神経外科が開設された年でした。その時の大阪大学医学部脳神経外科 最上教授の言葉は“この度、関西労災病院に脳神経外科を新設することになったので、その準備に行ってください”とのことでした。その後、一時(6か月間)大阪大学に戻った期間があったものの再び関西労災病院に就職し、2010年まで約37年の長きにわたりお世話になりました。入職した当時の関西労災病院は、空床があるにもかかわらず入院の必要がある患者さんが入院できない、手術室は空いているにもかかわらず緊急手術ができないなど、とても病院として機能を果たしているとは言えない状態でした。しかし、その後、病院は徐々に変化していきます。

2004年に小泉総理の方針により労働福祉事業団から独立行政法人に組織改革され「労働者健康福祉機構」となりました。それまで受けていた多額の交付金がなくなり、病院は経営的に自立しなければならず、不安が一杯の出発でした。

その後、病院機能評価の認定を取得することにより病院運営のあるべき姿が職員に広く認識されるようになり、また、DPCやBSCの導入によって診療体制の見直しや病院運営における各種指標の再認識など、様々な変化が起こってきました。医師の人事に関しても、大阪大学をはじめ近隣の大学から多大なご支援をいただくようになり、早川院長の指導の下に地域医療連携が強化されるなど、多くの状況が病院の発展につながっていったように思われます。さらには13年間に亘る病院の増改築が数々の変更を経て完成した時には、病院全体の雰囲気突然明るくなったように感じたのは私だけではないと思います。また、現在の林院長はその豊富な情報を駆使して病院を取り巻く様々な変化に適切に対応して、病院をさらなる発展に導いていただき感謝しております。

この様に、関西労災病院はその時々状況に対応しながら今日の姿を築いてきましたが、その中で私が一番感銘を受けたのは職員の意識の変化です。病院が対応しなければならない様々な状態に対して、各職場がそれぞれなすべきことを認識し、前向きに努力していただいた結果が、今日の関西労災病院の姿に結びついていると感じています。多くの職場、多くの職員が一致団結して一つの方向に向かうのは容易なことではありません。難しいことではありますがこの力を維持して、関西労災病院が患者さんの必要とする医療を提供できる病院であり続けていただけるよう切に願っております。

## 沿革

当院は、尼崎市の西北部、国立公園六甲山を仰ぐ風光明媚な武庫川沿いに位置し、阪神間における急性期高度医療を提供する中核病院として、勤労者医療と地域医療の推進に積極的に取り組んでいます。

特に、当院が所在する尼崎市は、人口45万人を有する大都市でありながら市民病院がないことから、市民が健康管理面において当院へ寄せる期待は殊のほか大きく、「地域に生き、社会の要請に応える病院」として、その存在意義は高く評価されているところです。

昭和25年	尼崎市が中心となり兵庫県、尼崎市商工会議所等と共同して労働省(現 厚生労働省)に要望し、関西労災病院の設置が決定
昭和26年11月	尼崎市の協力で33,212㎡の土地提供を受け、労働省所管の政府出資による最初の労災病院として着工
昭和28年 1月	開院。内科、外科、整形外科、理学診療科で診療開始(病床数50床)(財団法人労災協会が運営)
昭和28年 8月	眼科、耳鼻咽喉科、神経科、皮膚泌尿器科、歯科を新設(病床数100床に増床)
昭和31年 4月	当初計画の病床数548床に増床
昭和32年 7月	労働福祉事業団設立(財団法人労災協会から移管)。その後、産婦人科、小児科、麻酔科、脳神経外科、放射線科、形成外科の新設、皮膚科、泌尿器科の分科、検査科の独立など診療体制を整備
昭和35年 3月	総合病院認可。本館、手術棟、看護婦寮などの増改築工事に着手
昭和40年 3月	第1期工事(5階建東西病棟の東棟)竣工
昭和42年 1月	第2期工事(5階建東西病棟の西棟)竣工
昭和43年10月	結核病床50床、精神病床14床を設置(病床数612床に増床)
昭和45年 4月	付属施設として関西医療検査大学校を開校
昭和48年 3月	重症治療部(ICU)開設。病床数620床に増床
昭和48年 4月	関西労災高等看護学院(定時制進学課程)開校(昭和54年4月関西労災看護専門学校に名称変更)
昭和52年 4月	リニアック棟竣工。リニアック治療、リモートアフターローダー(体腔内治療装置)を含む放射線治療部開設
昭和54年 4月	X線CTスキャナー導入
昭和56年 8月	心臓血管外科新設
昭和57年 7月	健康診断センター開設。手術部、中央材料部、放射線部、検査部、薬剤部などの拡充整備
昭和58年 4月	病床数656床に増床(一般病床66床増、結核病床30床減)
昭和58年12月	病床数666床に増床
昭和59年 4月	厚生省臨床研修病院指定
昭和59年 5月	病床数670床に増床
昭和60年 6月	精神科新設(18診療科)
昭和62年 3月	医療検査大学校閉校
昭和62年 4月	神経科の標榜を神経内科に変更
昭和63年 4月	磁気共鳴装置(MRI-CT)設置
平成 3年 4月	13年計画の増改築工事開始
平成 5年 3月	関西労災看護専門学校の増改築工事竣工
平成 6年 1月	体外衝撃波結石破碎装置(ESWL)設置
平成 7年 1月	阪神大震災発生(診療を継続)
平成 8年 7月	兵庫県エイズ拠点病院指定
平成 8年10月	結核病床20床、精神病床14床を一般病床に変更(一般病床670床)。第1期工事(南棟(9階建て))竣工
平成10年 1月	勤労者メンタルヘルスセンター開設
平成10年 4月	循環器科標榜
平成11年10月	勤労者医療推進室開設
平成11年12月	勤労者心の電話相談室開設
平成12年 3月	第2期工事(北棟(10階建て))竣工
平成13年 1月	神経・精神科を心療内科・精神科に変更
平成14年 1月	医療情報部開設
平成14年 4月	歯科の標榜を歯科口腔外科に変更。外来棟完成



平成14年 6月	救急部開設。管理棟西側部分完成
平成15年11月	病院エントランス部分、管理棟東側部分完成
平成16年 3月	13年に及ぶ増改築工事が竣工(ホスピタルパーク含む)
平成16年 4月	『労働福祉事業団』から『独立行政法人労働者健康福祉機構』へ組織改編
平成16年 9月	病院機能評価認定(一般病院 Ver.4.0)
平成16年10月	病院創立50周年記念式典実施。化学物質過敏症診療科新設
平成16年11月	ガンマナイフ(定位放射線治療装置)導入(同年12月治療開始)
平成17年 4月	早川院長に代わり奥院長就任。JR福知山線脱線事故の被害者に対するメンタルヘルス電話相談開始
平成17年 6月	南6階病棟(一般病棟)を回復期リハビリテーション病棟(52床)へ改装(同年8月稼働、平成19年南7階病棟に移動)
平成17年 9月	アスベスト疾患センター設置。エキシマレーザーによる冠動脈形成術(高度先進医療)開始
平成17年11月	結石破碎装置を新機種(ドルニエリソトリプターD)へ更新
平成18年 4月	放射線科の組織改編(放射線診断部、放射線治療部、核医学診断部が分離独立)。外科の組織改編(消化器外科、乳腺外科が分離独立)
平成18年 7月	DPC(診断群別定額払い方式)導入。緩和ケア対象病床8床から18床に増床
平成19年 1月	地域がん診療連携拠点病院指定
平成19年 2月	PET-CT(ポジトロン断層撮影装置)導入
平成19年 6月	心臓血管センター(CCU8床含む)設置(総病床数642床に減床)
平成20年10月	緩和ケア外科正式標榜
平成21年 6月	病院機能評価更新(一般病院 Ver.5.0)
平成21年12月	地域医療支援病院指定
平成22年 3月	地域がん診療連携拠点病院指定更新
平成22年 4月	奥院長に代わり林院長就任。320列CT、3.0テスラMRI導入
平成22年 5月	電子カルテシステム導入
平成23年 1月	消化器外科正式標榜
平成23年 3月	手術室4室増改築し、計13室体制を構築
平成23年 4月	乳腺外科、消化器内科、循環器内科正式標榜。医療連携総合センター開設
平成23年 9月	頭頸部外科正式標榜
平成23年11月	外来化学療法室を化学療法センターとして移設・拡充(13床→20床)
平成24年 2月	内視鏡センター設置
平成24年 7月	放射線診断科、放射線治療科正式標榜
平成25年 3月	超音波ガイド下処置室設置
平成25年 6月	病院創立60周年記念式典実施
平成25年 8月	多目的アンギオ室増設(アンギオ室2室→3室)
平成26年 3月	がんセンター棟竣工。強度変調放射線治療(IMRT)装置導入
平成26年 4月	病理診断科正式標榜。DPC医療機関群II群指定
平成26年 5月	病院機能評価更新(一般病院2 3rdG:Ver.1.0)
平成26年10月	術前センター開設
平成26年11月	手術支援ロボットda Vinci 導入
平成26年12月	P-CCU病棟(12床)をHCU病棟(12床)へ変更
平成27年 1月	中央処置センター、シャント外来開設
平成27年 3月	強度変調放射線治療(IMRT)装置2台目導入
平成27年 9月	呼吸器外科正式標榜
平成28年 1月	ハイブリッド手術室設置
平成28年 4月	『独立行政法人労働者健康福祉機構』から『独立行政法人労働者健康安全機構』へ組織改編
平成29年 2月	ガンマナイフ更新
平成29年 5月	電子カルテシステム更新
平成30年 4月	DPC特定病院群指定
平成30年 8月	遺伝子診療科開設
平成30年10月	MRI更新(1.5T→3.0T)

令和元年 5月	病院機能評価更新(一般病院2 3rdG:Ver.2.0)
令和元年 8月	循環器内科外来・生理検査室移転
令和元年 9月	CT、手術支援ロボットda Vinci 更新
令和 3年 4月	不整脈アンギオ室増設(アンギオ室3室→4室)
令和 3年 5月	PET-CT更新
令和 4年10月	手術支援ロボットda Vinci 2台目導入
令和 5年 5月	320列CT更新

以上のとおり、当院は時代の変遷に伴う労働態様や職場環境の変化、勤労者の疾病構造の変化等に迅速且つ的確に対応するため、診療体制の整備と施設・設備の拡充を図りながら勤労者医療を積極的に推進するとともに、当院の有する最新且つ高度な医療を広く地域住民に提供し、阪神間の高度急性期医療を担う拠点病院としての役割を果たすように努力しているところです。

### 病院建物の変遷



昭和28年1月 開院時



昭和28年1月 開院時 木造平屋の病棟



昭和32年7月 労働福祉事業団設立時





昭和59年 開院30周年当時 病院正面玄関全景



昭和59年 開院30周年当時



平成8年 現在の南棟完成時



平成16年4月 労働者健康福祉機構移行時

## 歴代病院長



初代 岩永 仁雄  
S28.4.1~S39.11.3



2代 長谷川 高敏  
S40.5.1~S52.8.31



3代 金子 仁郎  
S53.4.2~H2.3.31



4代 最上 平太郎  
H2.4.1~H10.3.31



5代 早川 徹  
H10.4.4.1~H17.3.31



6代 奥 謙  
H17.4.1~H22.3.31



# 近年の歩み(平成26年～)



がんセンター棟竣工・IMRT導入(平成26年3月)



がんセンター竣工式



手術支援ロボット da Vinci Si 導入(平成26年11月)



中央処置センター開設(平成27年1月)





ハイブリッド手術室設置(平成28年1月)



ドクターカー運用開始  
(平成29年1月)



手術支援ロボット  
da Vinci Xiへ更新  
(令和元年9月)



循環器内科外来移設、遺伝子診療科外来新設(令和元年8月)



生理検査室移設(令和元年8月)



不整脈アンギオ室新設(令和3年4月)



手術支援ロボットda Vinci Xi 2台目導入(令和4年10月)